

第60回試験研究成果発表会（野菜Ⅳ）発表概要

【日 時】 令和5年1月31日（火）13:00～16:55

【場 所】 農林総合研究センター大会議室（千葉市緑区大金沢町180-1）

発表1 成果発表

ハウス抑制トマトの優良品種の選定（第72回全日本野菜品種審査会）

～黄化葉巻病に強く、多収の新品種～

野菜研究室 橋本 奈都希

第72回全日本野菜品種審査会において、抑制トマトの優良品種の選定を行いました。選定された優良品種は、「TYみそら109」、「19K974017」、「C9-178 (SC9-178)」、「はれぞら」、「AS-379」の5品種です。黄化葉巻病に耐病性を有し、収量性に優れた各品種の特徴を紹介します。



1等特の「TYみそら109」



収穫物審査

発表2 情報提供

炭酸ガス施用の効果をも高める促成キュウリの環境制御

野菜研究室 大木 浩

最近、キュウリ栽培では炭酸ガス施用技術が改めて見直され、施用機器を導入する生産者も増えつつあります。しかし、炭酸ガスは単に施用すれば良いのではなく、効果の高い施用を行うには適切な環境制御も合わせて必要です。そこで、県内で栽培面積が多い促成キュウリのつる下ろし栽培を例に、炭酸ガス施用時の温湿度の調節や草勢管理の考え方について解説します。



促成キュウリ栽培



気温は通風筒を用いて正確に測定

発表3 成果発表

夏どリエダマメ栽培で発生するダイズシストセンチュウの緑豆すき込み法による防除

病理昆虫研究室 梶浦 真衣

千葉県のエダマメ栽培では、ダイズシストセンチュウの被害が問題となっています。このセンチュウはシストの状態で土壤中に長期間生存するため、転作や輪作による防除が困難です。そこで、夏どリエダマメ栽培後に、緑豆を短期間栽培しすき込むことで、センチュウ密度を低下させる「緑豆すき込み法」を開発しました。また、圃場ごとの汚染状況を簡単に把握し、適切な防除対策を選択できるような指標を策定しましたので、併せて紹介します。



ダイズシストセンチュウの二期幼虫



エダマメの根に付着したシスト

発表4 情報提供

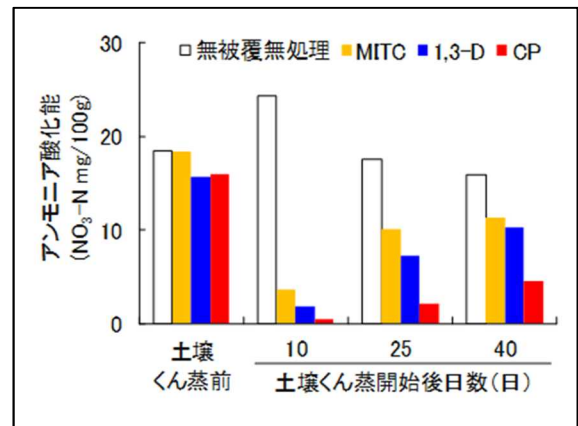
土壌くん蒸により畑土壌中の硝酸化成が阻害される期間と対策

土壌環境研究室 宮吉 沙知

畑土壌中の硝酸化成は、微生物が肥料などに含まれるアンモニウムを硝酸に変化させる反応であり、畑地における農産物の多くが硝酸を吸収することから農産物を生産する上で重要です。土壌くん蒸は、土壌病害虫を防除するための基幹技術ですが、微生物反応である硝酸化成も阻害します。今回は、土壌くん蒸により硝酸化成が阻害される期間と対策を紹介します。



土壌くん蒸剤かん注の様子



薬剤による硝酸化成阻害期間の相違

発表5 成果発表

11月どりブロッコリーの優良品種の選定（第69回千葉県野菜品種審査会）

水稲・畑地園芸研究所 東総野菜研究室 鈴木 結花

第69回千葉県野菜品種審査会において11月どりブロッコリーの優良品種の選定を行いました。優良品種には「ラウンドスター」、「BL-458」、「夢あたる」、「BL-461」の4品種が選ばれました。11月どりブロッコリーの栽培の注意点とこれらの品種の特徴を紹介します。



1位の「ラウンドスター」
(朝日アグリア (株))



立毛審査

発表6 成果発表

4月のブロッコリー端境期を短縮する栽培体系

水稲・畑地園芸研究所 東総野菜研究室 鈴木 結花

千葉県産ブロッコリーは、秋冬どりの出荷が3月下旬に終わり、春どりの出荷が5月上旬から始まるため、4月が端境期となっています。そこで、極晩生品種「クリア」及び「ゆめさくら」を用いた4月上旬どりと中早生品種「おはよう」及び「恵麟」を用いたトンネル・マルチまたはべたがけ・マルチ栽培による4月中下旬どりを組み合わせた、4月の端境期を短縮する栽培体系を紹介します。



4月8日に収穫した「クリア」



中早生品種のべたがけ・マルチ栽培

発表7 成果発表

サトイモ疫病の発生生態と防除対策

病理昆虫研究室 中田 菜々子

サトイモ疫病は2016年頃から千葉県内で被害が報告され始めた病害です。日平均気温が25℃を超え、まとまった雨または少量でも数日に渡る降雨の後に発病が始まります。初発後すぐのアミスルブロム・シモキサニル水和剤散布が有効で、その後の定期的な殺菌剤散布により発病を抑えることができます。その他、種芋や野生え芋が伝染源となる可能性や、殺菌剤のドローン散布試験の結果等について紹介します。



発病圃場



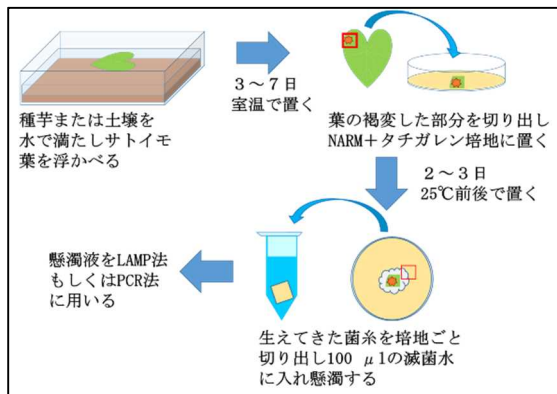
ドローン散布

発表8 成果発表

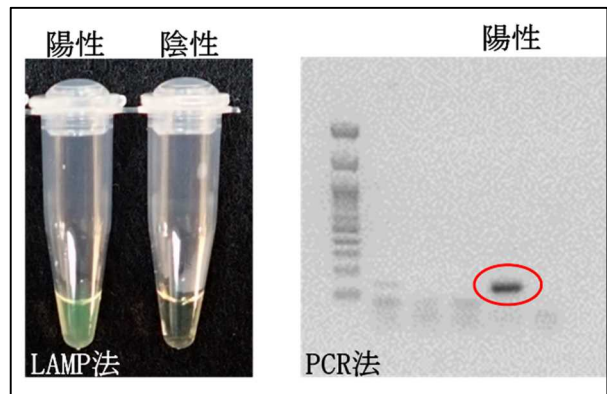
サトイモ疫病菌の簡易検出技術

生物工学研究室 大川 美沙

サトイモ疫病は短期間で圃場に蔓延し大幅な減収をもたらすサトイモの重要病害ですが、近年問題になった病害であることから発生生態が未解明でした。そこで、サトイモ疫病の伝染源を解明するために、遺伝子診断法によって種芋や土壌からサトイモ疫病菌を検出する手法を開発しました。開発した簡易検出技術を用いて、種芋が次作の伝染源となる可能性が考えられましたので紹介します。



簡易検出技術の流れ



簡易検出の結果

発表9 情報提供

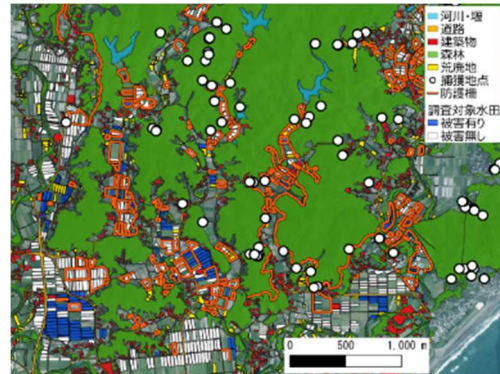
イノシシ被害発生要因となる景観構造 ～事前に行う有効な対策とは～

暖地園芸研究所 生産環境研究室 内田 耕陽

イノシシ被害対策として、①生息環境の管理、②防護柵の設置、③捕獲が有効とされていますが、全ての圃場に対策を行うのは労力とコストがかかります。そこで、令和元年～3年に南房総市で行った水稻のイノシシ被害調査の結果から、被害の出やすい圃場周辺の景観構造を整理し、対策を優先すべき圃場の環境要因を明らかにしたので紹介します。



山に生息するイノシシの群れ



景観構造とイノシシ被害地点マップ